

書評

Lessons from a Materialist Thinker *Hobbesian Reflections on Ethics and Politics*

Authored by Samantha Frost
Stanford University Press, 2008

フロスト, サマンサ 著
『ある唯物論的思想家からの教訓：倫理と政治のホッブズの省察』
スタンフォード大学出版、2008 年刊

評 渡邊 悟史

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程
Reviewed by Satoshi Watanabe
Doctoral Program, Graduate School of Media and Governance, Keio University

1 本書の意図

忘れられることなくトマス・ホッブズはくり返し論じられてきた。その理由の一つは、社会が崩壊し人間がむき出しになってしまったという時代感覚が優勢になるたびに、個人から社会秩序はいかに構想可能かという問いに取り組んだ思想家、という彼のイメージが呼び起こされてきたことにあるだろう。ジーン・ハンプトンがホッブズに「極めて強い個人主義の一種」を見出すのは正しいとし、その個人主義は「政治社会だけでなくすべての社会関係よりも個人が概念的に先にあるものとみなす」ものだ (Hampton, p.6) と言うとき、そういったイメージが示されている。ここではホッブズの思考の出発点は、何かに埋め込まれたりしていない、自律的な個人だとされる。

このハンプトンの見解に真っ向から異議を唱えているのが本書の著者、サマンサ・フロストである (p.175)。彼女はホッブズとは「私たちの深い相互依存性を認識し、それに基づいた政治の分析 (p.169)」

を行った思想家なのだと主張している。常にすでに他者や物との関係に条件づけられている人間がホッブズの出発点だというフロストは、その観点から彼の政治や倫理に関する議論を再構成しようとする。この野心的な試みによって再考されたホッブズのイメージは、彼を呼び起こす時代とこれまでとは異なる形で結びつくかもしれない。まずは要約的にはなるが本書の内容を追ってみよう。

2 内容

ホッブズが生きた 17 世紀西欧は動乱の時代であり、「人間とは何か、何であり得るのか」ということが様々に問われた時代でもあった。フロストはこの問いは現代においても切実で、ホッブズの人間論は忘れられた可能性として読み返される価値があると示唆する (p.5, 11)。第一章では同時代人であるデカルトの心身二元論と比較されながら、ホッブズの政治思想の基盤となる彼の人間像が検討される。フロストの主張の要点は、ホッブズは物質を超えた

「精神」を設定しないということである。であるならばこの動いている人間のカラダはどう理解できるのか。フロストがホッブズから引き出すのは、人間は物 (matter) 以上のなにもものでもない、ただし「考えている身体 (thinking-body)」なのだということである。彼女はホッブズの考え方を「変幻多彩な唯物論 (variegated materialism)」と呼ぶ (p.6, 21)。ホッブズにとって物とは常に単一で不変の特徴を保持し続けるのではなく、すべて変化に富んだものとしてあったと彼女は言う。あらゆる物は時間の流れの中で働きかけ、働きかけられながら相互に変化していく。ホッブズによれば「なにもものもそれ自らでは変化し得ない (Hobbes, p.87)」のである。

フロストは人間の身体もそのような性格を持ったものとしてホッブズは描いていると述べる。彼女曰く、ホッブズが主張しているのは、身体も、物や、物としての考えている身体たちの相互交渉の連鎖の中にあり、それに条件づけられているということである。『リヴァイアサン』の第2章や第3章で示されているとおり、身体は物の世界からの様々な刺激を連鎖的に受けて、様々な感覚や映像を生じさせる。感覚・映像は嫌悪、欲求、希望、絶望、恐怖といった情念を生みだすとともに、これらの情念に性格づけられ、次々と継起してゆく感覚運動が生まれる (Hobbes pp.87-99)。仮にここで「精神」を登場させるならば、自己が今考えているということを知っている「精神」は自律的にこの感覚運動を統制し、それを思考と呼ぶだろう。ところがホッブズの示す、考えている身体は、ある感覚・映像の次にいつ、どのような感覚・映像が続くのか自律的に選べないのだとフロストは述べる (p.31)。彼女は、自己の内部と外部との境界が曖昧な、考えている身体は、その感覚運動のあり様が常にすでに無数の複数の連鎖に接続されてしまっていて「穴だらけ (porous)」なのだと述べる (p.34)。

もちろんホッブズは感覚の混濁や単調さを主張しているわけではないとフロストは議論を進める。第二章において、感覚運動を方向づけ、深化させるものとしてフロストがホッブズから見出すのは、「経験」と定義・名づけといったコトバを用いた「推

論」である。それぞれの考えている身体は物の相互交渉の連鎖の中で固有の生活史を歩む。その生活史を通してそれぞれ固有の感覚運動の来歴と癖が物としての身体に、必ずしも自覚されるわけではないような形で刻印される。その来歴と癖とが感覚運動の参照先として身体に蓄積していく。これが経験である (p.93)。一方、「推論」はいくつかの感覚や映像に名や定義を与えることで、なんとかその映像の組み合わせを残しておこうとする営みはその端緒としてある。しかし、これはなんら能動的な感覚運動の制御につながるものではないとフロストは言う。むしろ名を与えるということはその名に関連するコトバたちが喚起するイメージの繋がりに身を任せるといって他ならない (pp.59-64)。経験とコトバによるイメージの繋がりは、感覚運動に数多くの脱線や不意打ちをもたらす。これを彼女は「換喩的構造 (metonymic structure)」と呼ぶ (p.47)。

第三章でフロストは以上のようなホッブズの考え方を「決定論」と呼んだ上で、その詳細な検討を行っている。「なにもものもそれ自らでは変化し得ない (Hobbes, p.87)」というホッブズの言葉はたしかに決定論的な思考を示唆しているが (p.69)、それは単なる自由意志の否定に留まらないものであるという。この章の前半の素材はホッブズと司教ジョン・ブラモール (John Bramhall) との論争である。フロストによってブラモールは、もし人間が自分の思考を統制できず自身の行為のあり様を決定できないのであれば、それは行為の責任主体の喪失に他ならないとホッブズを非難する、人間の自律性の擁護者として紹介される (pp.70-73)。フロストはブラモールへのホッブズの反論の注解を通して、その倫理的含意を引き出そうとしていく。彼女によればホッブズの決定論にとって重要なキーワードは『リヴァイアサン』の第6章に登場する「熟慮 (deliberation)」である (p.101)。熟慮とはあることが「なされるか、不可能と考えられるかするまでに継続した、意欲、嫌悪、希望、恐怖の総計 (Hobbes, p.127)」である。フロスト曰く、熟慮の過程においていかなる情念や感覚・映像が継起するのかというのは、その人間が、現在および過去に関わってきた、考えている身

体や物たちに条件づけられている。ということはホッブズが示しているのは、熟慮の過程とは、時制としても脈絡としても複数の、長大な物同士の相互交渉の連鎖の線分であるということなのだと言ふ (p.103)。彼女の読みに従えば、考えている身体を連鎖の通過点としてみることはホッブズが『リヴァイアサン』第16章で論じる「人格 (person)」の意味を際立たせることになる (p.104)。ある行為を代表し、オーソライズする「人格」は所与のものとして考えることはできない。ある行為の背景には常に長大な連鎖があるとすれば、「人格」という責任主体の構成やその規模・範囲・時制は争い得るというわけである。

さらにフロストは、この考えている身体のあり方自体がその動き方に独特の要求を突きつけるはずだと論じていく。ホッブズ的人間と言えれば好戦的で利己的な孤立した存在であるという通俗的な見方 (p.133) に対して、フロストは彼の議論はむしろ、何が起るのか不安で周りの顔色を伺いながらなんとか生き抜こうとしている、「孤独 (lonely) かもしれないが孤立 (alone) はしていない (p.140)」人間の倫理学と政治学なのだと言っている。この論点が第四章、第五章で展開される。常にすでに連鎖に巻き込まれた、考えている身体は、その自己保存を図ろうとすれば自身の行為がその連鎖に中長期的にいかなる影響を与えるのか、自身の行為がいかなる連鎖の中にあるのかということに目を向けざるを得ないとフロストは言う (p.143)。他者たちの感覚・映像や情念、それらの交錯を視野に入れてふるまわなくてはならないのである。これをフロストは人間の相互依存 (interdependence) と呼ぶ (p.135)。

ここで重要なのは、ホッブズの用語法では「原因と結果」と「権力と行為」とは同じ関係だと『物体論 (De Corpore)』の検討を通してフロストが指摘していることである (p.136)。前者は過去について、後者は未来について使うという違いがあるだけにすぎず、フロストはホッブズの権力とは、何かが結果するための原因群の配置状況のことだと結論している (p.139)。この文脈において、なぜホッブズが『リヴァイアサン』の第10章において、名声や

友情、信頼、忠誠、承認の獲得にかかわる、人間のふるまいや見た目の工夫・手管の意義を論じているのかが理解できると彼女は議論を進める。この読解によると、人間にとっても、そして人間の集合体にとっても、相互依存の連鎖はあまりに長大で不確実性に彩られたものとして現れるのであり、人間や集合体は自身の行為の条件を少しでも安定させようと試みざるを得ない。フロストは、かの「信約 (covenant)」もその一環として理解できると主張している (pp.165-169)。こうして彼女はホッブズに自己と他者を条件づける長大な連鎖に目を向ける倫理と政治の要請を見出している。

3 評価

本書は、能動と受動、選択と非選択といった私たちが陥る対立を乗り越える試みとしても示唆に富む。すでに私たちが共存のために行っていることを再発見せよというメッセージも見逃せない。だがこれだけでは彼女の注釈につきまとう牽強附会の疑いを強めるだけだろう。なによりホッブズを通さずとも言えることである。

本書にホッブズの魅力である毒を以て毒を征する式の烈しさが失われているのは否めない。身体に社会的なものが発見できるのであれば、倫理を構想することは難しいものではあるまい。「毒抜き」の印象はホッブズが随所でこだわる人間の「高慢さ」が本書ではまず触れられないことによって強まる (リヴァイアサンとは全ての高慢な者たちの王だ)。フロスト自身の、敵対性の執拗な持続と平和の希求を同時に見ている点でホッブズは魅力的なのだと言記述 (p.20) は宙に浮きかねない。

だが断片を拾ってフロストの「熟慮の過程」を推測すると、ねじれが現れる。彼女は本書の最後で「ホッブズは、もし私たちが自律や自己統治といった短絡的な幻想にしがみつくとすれば、どんな未来が可能なのか、どんな未来を閉ざしているのか慎重に検討することも要求している (p.172)」と書く。身体はこの検討の起点として賭けられているはずである。ところがフロストはさり気なく、人間の条件たる物の連鎖は人間にとってあまりにも

長大で複雑すぎるので、人間は自身のこの条件を忘却し、そこから抜け出てあたかも自由 (“free”) であるかのように考えがちなのだと言及している (pp.100-101)。この含意は重大だ。人間は自身に社会を刻まれていながらそれを忘れ、社会に抗する社会になってしまう。これはフロストが目立たない形で読み出している、もうひとつの人間の条件に他ならない。

私たちは二重に条件づけられているのだ。たしかに不幸にも現代ほど、連鎖の中にある物や他者や過去の姿を想起し直すことが切実に求められている時代はないだろう。しかし私たちは「短絡的な幻想」から完全に抜け出せるわけではない。それは単なる妄想ではない。だからこそ「短絡的な幻想」について慎重に検討することが要求される。忘却された物の連鎖の痕跡は、「短絡的な幻想」にこそ陰画として貼り付いているのではないか。その痕跡の姿形に、忘却と想起のせめぎ合いを見出すべきなのではないか。唯物論者の教訓を私たちは、声高な正義ではなく、こうしたねじれた問いとして受け取るべきだろう。社会の「再生」への直行便より、この回り道に評者はありたい。

参考文献

Hampton, Jean. *Hobbes and the Social Contract Tradition*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986.
Hobbes, Tomas. C. B. Macpherson ed. *Leviathan*, New York: Penguin, 1651=1968 (邦訳は、水田洋訳『リヴァイアサン (1)-(4)』岩波書店、1954-1985を参考にした。)

[2010. 2. 16 受理]

[2010. 7. 13 採録]